

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム

令和7年度 第3回公民連携会議 会議録

日時：令和7年11月19日（水）13：30～15：30

場所：奄美市役所 名瀬総合支所 8階委員会室

I. 開会

2. コアメンバー自己紹介

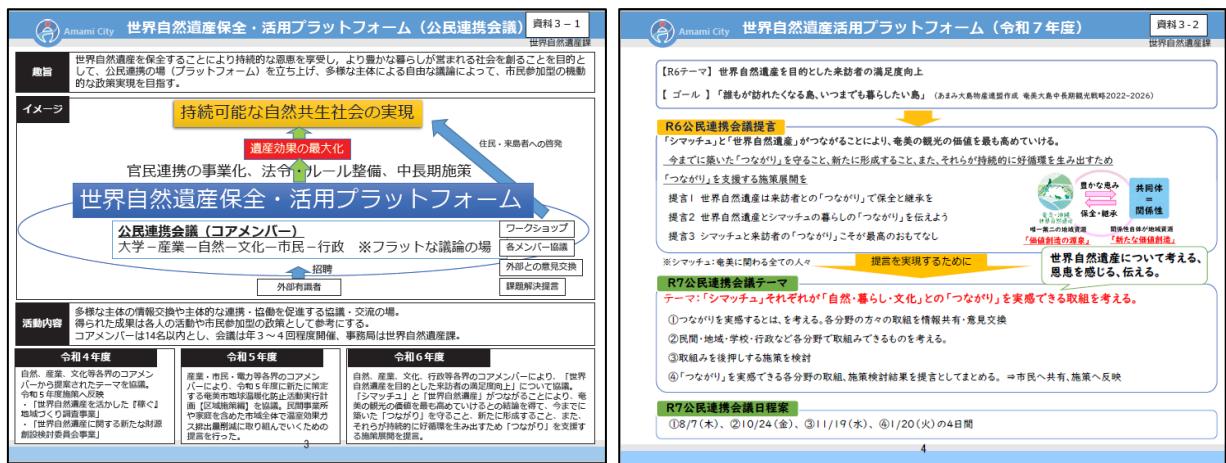
大正大学 地域構想研究所准教授 岩浅 有記 委員の自己紹介

NPO 法人アマミーナ 德 雅美 委員の代理出席 上堀内 ちあき 氏の自己紹介

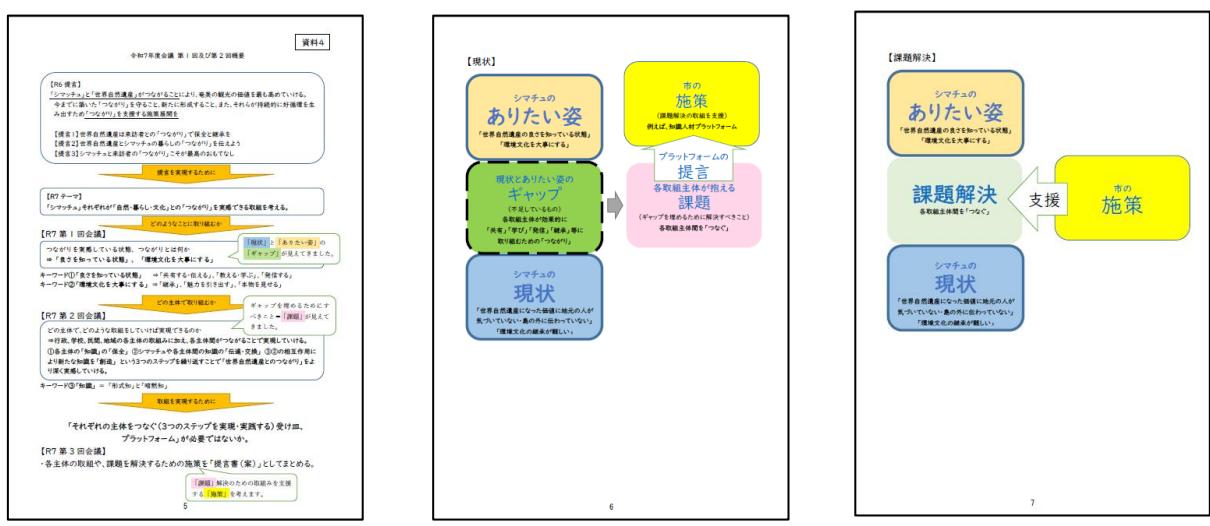
3. 議事

(1) 前回までの振り返り

「公民連携会議の趣旨」や「令和7年度のテーマ」等について再確認



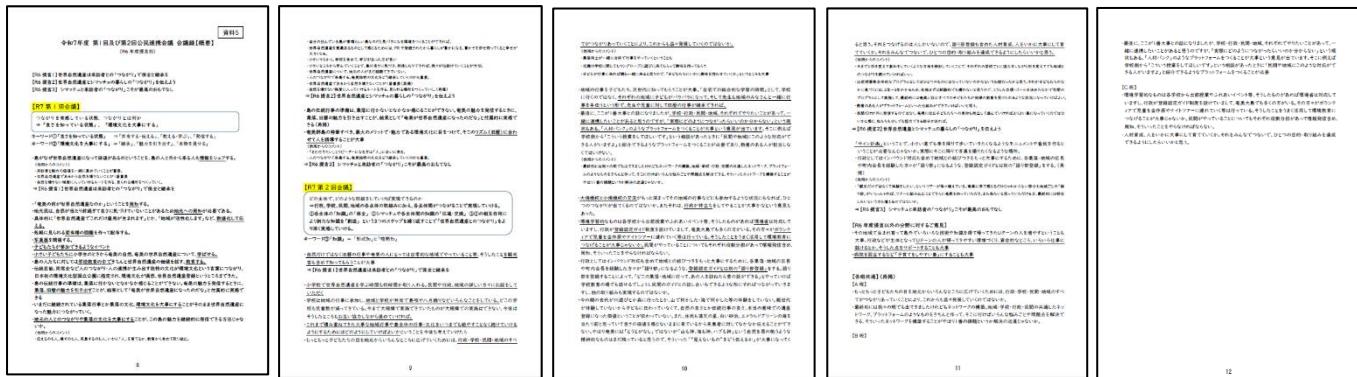
第1回及び第2回会議の振り返りと第3回会議の内容の共有



奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム

令和7年度 第3回公民連携会議 会議録

第1回及び第2回会議の会議録概要の共有



(2) 提言検討・協議

◆検討・協議開始前に馬場座長よりご説明

本日は最終章といいますか、1月には提言書を市長に提出しますので、本日は提言書案をみなさんと一緒に作っていきます。

提言書の形式はA4サイズ1枚程度にまとまったもののイメージです。これまでのみなさまの議論と市への提言を1つの資料にまとめるため、簡潔で端的なものという点がひとつのポイントです。

前回までの会議で3班に分かれてワークショップをしていただき、

●課題

●市が公共として課題を解決するためにはどうすればいいのかというところを考えました。

例えば、公民連携会議のような様々な専門家の方たちが集まり、「価値を提供できる知識人材プラットフォームみたいなものが必要」というお話が出ていました。これも提言のひとつだと思います。

本日はみなさまの立場からのご意見や会議を通して考えていたこと等、「地域課題の解決のために行政としてどのような施策を展開することができるか」についてお一人ずつお話を伺えればと思います。

「知識人材プラットフォーム」やそれ以外の視点からでも構いません。

2~3分ほど考え方をまとめる時間を取りたいと思います。

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム

令和7年度 第3回公民連携会議 会議録

◆各委員からの意見発表

各委員のご発言に対して馬場座長がコメントをする形式で進行。

濱田委員

第1回会議から参加させていただき、「令和7年度は令和6年度の内容をうけて何か具体的な形で提案ができれば」ということは最初に聞いていた覚えがあります。資料にも「プラットフォームが必要ではないか」と書いてありますが、まさにこれが需要ですよねっていう話だと思います。

第2回会議のキーワードとして「知識」があり、知識には「形式知」と「暗黙知」があるとの話であった。「暗黙知」あるいは「土着知」という言い方もあると思うが、この辺りのギャップを埋めるものがまさにプラットフォームからの提案であり、地元ならではの提案ができるのではないかと思っています。

具体的に言うと、地域の活性化とか戦略とか課題解決の案とか、そういうものは、全国の事例を見たらいろいろなものがあるわけで、それを引っ提げてやってくるコンサルもいる。それを持ってきて「じゃあみんなで解決しましょう」とできるのかといえば、現地の住民の方々とか地域が腑に落ちないとなかなか前に進まないということがある。そして堂々巡りになっている話もいっぱい聞く。「暗黙知」「土着知」をしっかり受けとめて、「それ一体何だろう」と理解して咀嚼（そしゃく）するチームが必要。それがまさに知識人材プラットフォーム。

例えば具体的な制度として「地域おこし協力隊」があり、全国的にも多くの予算が投資されて、一定の効果が出ているが、おおむね3年と期限が決まっている。任命されたときに強制観念とまでは言わないが「3年間で、“この人を呼んでよかったね”と思えるような成果を出さないといけない」という状況の中では土着知を受け止める前に解決策を一生懸命出そうとするところに集中してしまう。どんなに熱意があっても土着知のところまで至らずに終わるパターンが多々あって、「なんか一生懸命盛り上げてくれたね」で終わる。彼らを否定しているのではなく、熱意はあるが期間があまりにも短く難しいという制度のあり方を言っています。

そういう意味では、僕は、地元で生まれ育って本土にいる「本当は地元に帰って来たい」「地元に貢献したい」Uターン者に公的な資金が投資できるのであれば、地元の土着知や暗黙知を何となく、肌感覚で分かっている人が帰ってきてくれると思う。しかも本土での経験値、いろいろな経験を積んだうえで、バランスの取れたファシリテーター・つなぎ役にもなる人材が帰ってこられるのではないかと。そういうところを提案できればいいのではないかと思います。



濱田委員

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム

令和7年度 第3回公民連携会議 会議録



馬場座長

ありがとうございます。「土着知」と呼ばれるような、島の人がいわゆるDNAレベルで理解しているところを共有するのがなかなか難しかったり、あるいはそれを言葉や文章で表出化していったりするようなことが、かなり難しいと。ただやはりそれはとても必要な作業で、土着知や経験的な暗黙知というのを、様々な主体間で理解・共有して、そして表出化する過程、これがすべての課題になっているというところかなと思います。

具体的なお話で言うと外から来てくれた方、都会から来てくれた方が一生懸命、島のためにやるけれども、やはりDNAレベルで理解しておかなきゃいけない前提を理解する時間がなかなかないし、それを獲得するには時間と関わりの深さが必要で、どうしても島出身の方のほうが有利であると。そうなってくると今、本土で働いている人、僕もよく聞くのですが、帰ってきたいけど仕事がないよねとか、帰ってきたいけど家族がねっていう方が適任ではないかと。

今は都会から来てくれる若い方のパワーに地域おこし協力隊等で頼っている部分があるけれども、今後はそこからターゲットを変えて、いわゆるシニア、60代の方なんて、まだまだすごくお元気でいらっしゃるので、60代以降の方をUターンとしての施策の中で支援することができないかと。そのほうが、やはり島のDNAが流れているのもそうですし、本土の理屈や都会のいわゆる成果主義的な部分も理解しているというところで、島の中で媒介者となってくれるのではないかと。そういう知識を繋いでいく媒介的なことができる方を、島に呼んでくるじゃないですか、そういう施設展開も必要じゃないかという理解でよろしいですか。

ありがとうございます。もちろん切り口としての1つの提案として、こういうこともぜひ具体的に政策として、提案できたらいいなっていうところです。もちろんどの政策も、「100%、これ一番いいよね」っていうのはまずないと思うので、多少ごちゃごちゃしてもそれは改善点として捉えるようにして、みんなで「これいいかもね」っていうのを1回やってみて、改善して、また次へという最初の一歩。そういうのも全くないよりは、やってもらえたらいいのかなっていうのを提案できたらいいなど。



濱田委員

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム

令和7年度 第3回公民連携会議 会議録



馬場座長

これ例えば、今奄美市に住んでいらっしゃらない、例えば東京とか大阪に住んでらっしゃる方で、自分のリソース（資源・資産）の100%ではなくても1割は関わりたいなとか、そういう方向けでもよろしいですか。

そうですね。いろいろなジャンル・角度があると思うので、さっき僕ちょっと口悪く「コンサルがやってきて、解決策持ってきて、それじゃなかなか…」って言っちゃったのですが、もちろん外部の方が来るとすごく刺激的で、学びがある。

自分は仕事柄、空間の設計とか、造園の設計施工業務に携わっているので、この4～5年、環境省の方々とも接する機会があるのですが、やはり学びがいっぱいある。

今日久しぶりに岩浅委員にもお会いしたのですが、岩浅委員ともいろいろお話しして、なるほどなって思うところもあるので、当然そこはそこで、外部からのいろいろな新しい物の見方とかもある。

「暗黙知」「土着知」というところに落とし込んでいったときに力を発揮する人材を受け入れるものがあればいいなということですね。



浜田委員

浜田委員にお名前を出していただいて、非常にまた触発されたのですけれども、広い、非常に重要な視点をいろいろ今、浜田委員からいただいたかなと思います。

やはり今回の「政策にしていく」っていうのが大事だと思うので、人材育成確保、より解像度を高めた政策を列挙して提案できるといかなっていうのがまず、総論として思ったところです。

ちょっと事務局にも確認してみたいのですけれども、地域おこし協力隊の方々はいろいろ集落に入って奮闘されている方がいっぱいいらっしゃると思うのですが、その方たちのお悩みを共有したり、技術的な専門的な助言をできたりする仕組みがあるのかなっていうのをちょっと聞いてみたいなと思うのですけど、いかがですか。



岩浅委員

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム

令和7年度 第3回公民連携会議 会議録



事務局職員

私も地域おこし協力隊の方と直接関わったことはございませんが、3地区にそれぞれ地域おこし協力隊の方がいらっしゃっており、基本的には取り組まれているお仕事の担当部署が直接関わっているというふうに感じております。

数年前に受け入れたときも担当課の方でいろいろ対応していました感じがあって、岩浅委員がおっしゃったような、業務以外の部分、地域で生活していく中でのサポートといいますか、そういう部分についてはおそらくフォローする体制ができないのではないかと感じています。

岩浅委員

ありがとうございます。多分業務内のアドバイスも市役所、地域の方々にしていただいていると思うのですが、地域住民の方もそういった協力隊の先生になれると思いますし、島の外の有識者が少し助言するような、また業務以外の生活面も含めてフォローする体制が取れるといいかなっていうのはちょっとと思ったところです。

というのも、先週出張でパラオに行ってきました、観光と環境の先進地っていうことで私もずっと気になっていて多くの学びを得たのですが、JICA隊員の方が、各地の本当に小さな集落に入って、アパートとかもないですから、ホームステイして、奮闘されています。日本の女性で大学を出てすぐ働いて、エコツーリズムの育成というかエコツーリズムのツアーメニューを地元と一緒に作っているという話ですが、やはりなかなかこの技術的な部分のサポート支援がJICAでもちょっと弱めなのかなと。そこら辺が課題になっていますという話を聞いてきたので、JICA隊員が国内だったらどこにあたるのかなと思い、やはり地域おこし協力隊の存在って非常に大きいかなと私自身は思つて、今ちょっとそういった視点を述べさせていただきました。

あとは、そうですね。先ほどの濱田委員のお話にもあったように、私自身、「生物文化多様性」っていう概念に非常に着目していました、今年、初めて大学で授業をやってみました。その経験としては、今までずっと私は「生物多様性」ばかりに着目して、生き物サイドからの教えはしていたのですけれども、それだと文系の学生には非常に理解が難しい。今回やってみて一番収穫だったのは、文化っていうのは、暮らし・食とかに変換できると思うのですけれども、そこから学生たちに入ってもらえたので、「生物多様性ってそういう意味だったのですね」とようやく繋がったのです。これはもうなんか私自身、生物多様性専門でやってきて、ちょっと落とし穴だったなと思っています。

まさしくその入口も重要だし、暮らしと生物文化多様性であるとか、「環境文化大事にする」というのが資料にあったと思うのですが、あえて強調して「暮らしと環境文化を大事にする」というのもありかなとも思います。

やはり先ほど「形式知」や「暗黙知」の話もありましたけれども、まだ文字化されてない、人々の頭の中でもやもやっとしている状態が暗黙知だとすれば、それを文字にし

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム

令和7年度 第3回公民連携会議 会議録

て共有化していくプロセス自体が、形式化していくわけですけれども、この生物文化多様性含めて知識偏重になっていると思いますので、やはり現場で体感すること。私も、先ほど濱田委員がおっしゃったように、「腑に落ちる体験」っていう、これをよく最近使うのですけれども、知識偏重だからこそ、現場で腑に落ちる体験メニューを、しっかり用意していくといったところが、もう1つポイントになってくるのかなと思います。

あと「形式知」や「暗黙知」に関しては、やはり聞き書きで記録をしておくとか、まだ文字化できないものに関しては、動画で記録しておくといったところも非常に重要になります。私は沖縄で仕事をしていましたけれども、向こうは「生物文化」という視点です。もともとは昆虫の先生で今はまさにその生物文化多様性の聞き書きをやんばる地域でずっとなさっている先生が調査される中でわかったことは、生き物と人との関わり、その中で生活暮らしが育まれてきたわけですけれども、昭和10年(1935年)生まれ前後でその知恵が急速に失われるという大きな示唆結果が出ました。これ奄美も似たところあると思いますから。先生はもう本当に文化財のような気持ちで必死に記録していると、記録しないともう二度と継承できないということで。ここは奄美も大事なポイントだと思いますので、「記録」ですね、ここは大事かなと思います。

あと資料に「ありたい姿」というのがありましたけど、これ自体はいいのですけれども、もう1つのキーワードとして、このままの状況であれば、こんなふうになってしまふみたいな「あり得る姿」というのも重要な概念・キーワードです。私はあまり「べき論」は好きじゃないのですが、経済的な側面でいけば、「こうあるべき姿」みたいな、そういうキーワードも重要ですので、それを念頭に置いていくことと、あと課題解決が少し前にバーンと出ている感じがするのですが、並列で、やはり「価値共創」、価値を共に作っていくという、これも並列で非常に重要なキーワードです。課題解決だけを続けていって本当にありたい姿に至るのだろうかというクエスチョンがつきますので、価値共創を並列で、課題解決と同じぐらい大事ですよということで位置付けていただけるといいのかなと思います。



岩浅委員



馬場座長

ありがとうございます。「暮らしと環境文化」ということで、第1～2回の会議のみなさまのお話の中でも「暮らしとお仕事」いわゆる「生業」みたいなそういう概念のお話も出てきたかなというふうに思います。

「知識の保全」というところでは、具体的なアイデアである「暗黙知のアーカイブは早急に行わなきゃいけない」ということも、第1～2回の会議でもみなさまのお話から出ていて、すごく整合的だなというふうに思っていました。聞き書きで記録していく、そしてメディア・動画の媒体で記録していく。そこが具体的な事業・施策として展開する必要があるなどいうのも、非常に共感するところでございました。

※注釈：「アーカイブ」とは記録やデータを長期間保存し再利用できるようにする仕組みや保存場所のこと。

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム

令和7年度 第3回公民連携会議 会議録

新屋委員

お二方の意見とあまり関係がない話になるのですが、資料にあるような「ありたい姿」を想定して動いている世界自然遺産に関心のある方もいると思いますが、その一方で、「地元の人が気づいてない」と資料にも書いてあるとおり、世界自然遺産に関する関心が低い方も多いのではないかなと思います。

やはりその人その人によって世界自然遺産に関する関心のありようというのは違うと思うので、それに対するアプローチというところも変えないといけないかな、というのが思うところです。

例えば世界自然遺産はいろいろな恩恵があると思うのですが、その反面、それを守るために規制というものがされると思います。観光でもそうですし、いろいろな規制があると思います。やはり昔から島に住んでいる人からは「いきなり規制が出てきた」という意見も聞くので、「規制しているのは、それによる恩恵があるからだ」ということをしっかりと伝えていくのが必要かなと思っています。

様々なイベントが行われているのですが、やはりそこに参加する人は世界自然遺産に興味がある方、自然環境や文化に興味がある方だと思うので、そういったところに参加しない方にも伝えていく必要があると思います。例えば、祭りやライブなど、世界自然遺産に関心があるかどうかに関係なく、みんなが集まるようなエンタメ性の高いイベントで伝えていくこともひとつじゃないかなと思っています。

できるか分かりませんけど、民間が主催するような100%エンタメのイベントで少し真面目な世界自然遺産の話をすると、今まで世界自然遺産に関して聞いたことない人が初めて知ることもあるのではないかなと思います。そういう情報は多分すごく浅い知識になるのですが、やはり興味のない人はまず浅い知識から入ってそのあと深い知識に入っていくことが必要かなと思うので、これまで全然関与してこなかった人に気づけるきっかけを伝えるのが大事かなと思います。

それから、やはり島の将来がどうなるのかということを考えてもらうこと必要かなと思っています。例えば「人口がどんどん減っていく可能性がある」とか、「開発が進んでしまうと魅力がなくなっていく」といういろいろな危機があると思います。20年30年、その先を踏まえて考えることが必要だと思うので、言葉を選ばずに言うと、「世界自然遺産を利用することでそういう危機を抑えられるし、より恩恵が得られる」ということをそれぞれに合わせたレベルで島民の方にも伝えていくのが必要かなと思います。

あとはプラットフォームに関しては私も賛成なので、いろいろな人がそこに関与していくべきだと思いますし、エンタメ系的なことを行っている民間の方もその中に入るのが大事かなと思います。



新屋委員

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム

令和7年度 第3回公民連携会議 会議録



馬場座長

ありがとうございます。非常に重要な指摘をいただいたかなというふうに思っています。私たちやここにいらっしゃるみなさまは世界自然遺産への関心度が高い人たちが集まっていますので、どうしても「関心度・関与度がある」という前提でお話をしていたな、と思います。

重要な指摘として、公共として行うのであれば住民全体をまず見るべきであって、そうなると関心度の違いに濃淡があるので、関心度が低い・関与度が薄い方っていうのは、みなさまの肌感覚では半数以上、6～7割がそうかもしれないというふうなお話も第1～2回の会議でもあったかなと思います。

そうなるとやはり大多数を占める関心度の低い人に向けてもアプローチしていくべきであるというのは非常に納得するところでございましたので、そこにやはり何か知識を伝達する・交換する。

そうなると、まずは認知していただきなければいけないというところで、いわゆる「学習」というよりは「エンタメ性」を意識したような、楽しく面白く伝えられるように民間の力の活用、ライブやお祭りというお話があったと思うのですが、それも知識人材プラットフォームの構成メンバーとして重要な要素だなというふうに私自身も思いました。

これから的人口減とか、過剰な開発等の将来的な課題についても、世界自然遺産の重要性を広く市民が知ることによって、関心も高まって解決の糸口になるのではないかというお話だったと思います。

上堀内氏

お尋ねします。プラットフォームの形は具体的にどういう形、場所があるのですか。それとも組織を作るだけなのか、そしてそれは奄美市だけなのか。奄美市として作るのか、広域でやるのか。あるいはそういうプラットフォームが全国の世界自然遺産地域の各所にあってそこが連携するのか。オンライン上だけなのか、誰でもそこのプラットフォームに入れるのか、入るためにには誰が審査するのか、リーダーは誰なのか。ということを聞きたい。

それから「ありたい形」が漠然とあるのですが、私は60代ですけれども、市街地に生まれ育って、幸い、母方の祖母が下方のため、DNA的には両方の文化は多少感じています。ちょっと若いときは都会に行ったりとかしましたのですが、結構人口も多いし、いろいろな業種があつたりするので、「奄美らしさ」の価値観がそれぞれ違うと思うし、残したいものがいつの時代のものなのか。明治時代なのか、産業革命以後なのかとか、昭和の初期なのかとか、せいぜい私達のじいちゃんの頃の話なのかとか、そういうところで違うと思うのですよね。そして、旧・三方村以外の名瀬の地域と下方、上方、古見方の土俵がある地域と、やはりちょっと違うところがあると感じる。どれをもって「奄美らしさ」とするのか、そういうところを、トータルで見られる方がリーダーにならな

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム

令和7年度 第3回公民連携会議 会議録

いと、何か固定観念みたいな奄美らしさが変に定着するのではないかと。いろいろな「奄美らしさ」があるので、変な理屈なのですが、ちょっと気になったところです。

あと、さっき言ったエンタメで、自然の専門家にストーリーを作ってもらって、若い世代にも人気の漫画家が漫画にしたらいいのではないかと想像して、一応お伝えします。漫画だとネット上にもあげられるためイベント会場に行かなくても良いし、そういうことができるかなあと。



上堀内氏



馬場座長

今のご指摘は非常に重要なと思っていて、実際にプラットフォームを形成していくとなったときには、今おっしゃったような、一体それがどういったふうな形で、リアルなのかネットなのか、事務局はどこなのかといった具体的なお話をしていく必要があると思います。今回の会議の到達点・目的は、その一段前の段階で、「こういったプラットフォームを事業としてやっていく必要があるのではないか」というところの提言をするというところでございます。もし市として実行していきましょうとなったら、今おっしゃったように、誰がやるのか・どこでやるのか・どのような広がりを見せていくのかというところまで、プランニングする必要があるのかなと思っております。

もうひとつの「奄美らしさ」というところだと思うのですが、おっしゃるように名瀬の中でも、あるいは奄美全体でいうと、「奄美らしさ」が地区によっても違うし、時系列上でも違うじゃないかというところがあると思います。それぐらい多様な状態ということがみなさまも容易に想定できると思うのですが、一人ひとりの奄美らしさを一人ひとりの文脈に落としていくことが重要なことかなと。特に「土着知」「暗黙知」という話になってきますと、非常に文脈的な、いわゆる「文脈価値」と呼ばれるものだと私は思っていて、それこそが価値共創に必要な1つの価値概念だろうと。一人ひとりの中に「奄美らしさ」というものが感じられるような地域の基盤を形成していくということが、やはり公共として支援すべきところなのかな。1つの意味での「○○らしさ」というものを求めるのは正解の方法ではないというのは多分おそらくみなさんもそうでしょうし、一人ひとりが「奄美らしさ」というものを持てる、そうした基盤を形成していくことが公共の1つの目的かななど、ちょっと私の考えも入っていますが。

3番目が一番興味深いですが、やはり先ほどおっしゃったようにあまり関心がない方に知識をお伝えする具体的な方法として、例えば漫画を使うやり方というのは、私もすごく興味があります。「どうやっていろいろな人に伝えるのか」といった事業を支援するような方向性もあるのかなと思ったところです。

ちょっとご質問に答えられていないところもあるかも知れませんが、素晴らしい指摘ありがとうございました。

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム

令和7年度 第3回公民連携会議 会議録

境田委員

現在、環境省として、「インタープリテーション全体計画」の中で「奄美大島のストーリーブックを作る」業務を行っております。そのストーリーブックは見えないものはどう伝えるかなんですね。「誰が誰に何をどう伝えるか」というのをストーリーブックにまとめて、それを絵本的な感覚・漫画チックなものにして作ろうとしております。

このストーリーの始まりは「昔々、奄美大島はユーラシア大陸の一部であった」ということ。特に今の子どもたちはそういうことを学校で教えないで知らない。そのため、そこからスタートしたいです。「なんで奄美と徳之島にしかクロウサギとハブがないの」ってお客様に尋ねられたらなかなか、パッと答えられない。それは成り立ちを知らないと答えられないわけですね。そうしたものを作ろうとしている状況があって、今回のこのプラットフォームもいろいろな「つながり」というのを議論していると思いますが、「世界自然遺産登録になった生物の多様性」と言われても、「何が生物の多様性なの？」と一般の方はピンとこないです。

私は観光案内所にも勤務したことがあります、お客様の問い合わせは「世界自然遺産登録になったけど、どこに行ったらいいの？」という内容です。なぜかというと、お客様にしてみれば最初に世界自然遺産になった屋久島は「縄文杉」というシンボルがあって、それを目がけてみんな登山に行く。でも奄美は「どこに行ったらいいですか？」という話になると、「金作原」「クロウサギがいる」「湯湾岳」とかいうそういう話になる。「固有種が多い」とか「希少動植物が多い」とかそういう話しかできなかつたです。それではお客様は納得しないですね。満足しない。

「国立公園指定が『環境文化型国立公園』となっているのは奄美群島だけ。奄美群島だけは、生態系管理型はもちろん、『環境文化型』という言葉が続いて新しい指定のあり方で国立公園になっている」ということは後付でいいと思います。成り立ちから始まり、「山は神様・海も神様・ハブも神様」というような自然を畏れ敬う精神というものは残っている・受け継がれているため、こうした状況、こうした見えないものを伝えないと本当の奄美的な良さというものがお客様には分からない。

「世界自然遺産登録になりました」「なぜ登録になったの？」というと、やはり先人たちが守り続けてきたから。そして五穀豊穣の願いを込めていろいろな行事、豊年相撲などもあるわけですね。そういうことをどう伝えるかということ。

地元の人にとっては白い砂浜、満天の星、エメラルドグリーンの海は当たり前。当たり前だけどそれに価値があるのだということを伝えなきゃいけないわけです。それが生物の多様性にも繋がっていくわけですので、島の人が当たり前と思っていることがいかにすごくて面白いことなのか。こうしたことを子どもたちが都会に出ても話せるように今回ストーリーブックを作ります。

奄美大島DMO (Destination Management Organization) という組織があります。「観光地域づくり法人」という名のもとで5市町村が観光庁に登録をして、事務局は奄美大島観光物産連盟です。5市町村が負担金を出資しますが、人件費にほぼ使われているため、自主事業がなかなかできない。そのため、人を増やしても予算がないという状況がありますので、奄美市では宿泊税導入の議論もありますが、DMOがきちんと目的を

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム

令和7年度 第3回公民連携会議 会議録

達成できるような予算がやはり要るわけです。そのためこうしたことに予算を使うような状況に持つていければ、本当の意味でこのプラットフォームが前に進むようになるのではないかと思っております。

奄美群島の「エコツーリズム推進全体構想」の中で登録ガイド認定制度があります。この前、我々の業務でガイドさんや地域の方、受託事業者とヒアリングしたのですが、その中で、全国のストーリーブックを作っている事業者さんが「奄美はすごい」と。何がすごいかというと、先人たちが守ってきた自然環境、生活環境を今も守り通して、守り通してきたからこそ世界自然遺産登録になったというところ。先人たちが「自然を畏れ敬う」ということをやってきたから今残っているわけです。

世界自然遺産登録になったということ也要因のひとつではあるかもしれません、それを子々孫々に継承するために、金作原に行くためには予約をして認定ガイドを同行しなければならないという自主ルール、入域制限がある。ナイトツアーでクロウサギを鑑賞するにしても、予約制で両方から30分おきに10キロ以下で走る等の自主ルールを設けている。湯湾岳にしても、ゾーン分けをして頂上まではいけないということをしている。それが保全・保護に繋がっているわけです。そうしたことを実際にやっている奄美が素晴らしい、ということなのです。

そうしたことを地元の人にはどう伝えて後世に継承するかということになると思いますので、やはり僕は施策の1つとして、各集落に「語り部（かたりべ）」を置くべきだと思います。その地域の小学校に語り部が出向いて話をする事業など、行政がそうした事業をやることで学校も頼みやすいという状況になるし自然を畏れ敬ってきたことが受け継がれていくのではないかと。僕はそれを取りまとめるのが奄美大島DMOでもいいのではないかと思う。

語り部が「人と人のつながり」や「自然と自分たちの暮らしのつながり」等を話すのを子どもたちが聞いて、「昔の人はすごかったのだ。だから今も自然が残っている」と良さや価値を感じる。高校を卒業して95%前後は島を出るが、奄美出身ということに自信と誇りを持って「世界自然遺産の島、奄美大島から来ました」と言って、夏休みに「島に遊びに行こう」と友達を連れてくる。そして自分が都会で学んだことを島で活かせないかと思って帰ってきて、ガイド等、生業として事業を起こすことに繋がればいいと思います。

子どもたちが自分の生まれ育った地域に誇りと自信を持って、島外に出ていたら伝える、そして語り部も訪ねてきた人に伝える。市民全体で島の良さを伝えていくことが大事なことではないかと。奄美大島の良さ・価値・魅力を伝える人がいないと、語り部がないと、お客様はレンタカーのナビで景勝地だけ見ていっても、二度と来ないとと思う。地元の人と出会って、話を聞いて、島の料理が食べられる居酒屋に行ってそこのマスターと話してファンになってまた来る。

お客様の満足度が上がり、リピーターになる状況を作ることが市民参加型のプラットフォームじゃないかなと思います。

境田委員



奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム

令和7年度 第3回公民連携会議 会議録



馬場座長

ありがとうございます。
例えば60年とか70年前とかだと、成り立ちや神様についてとかアニミズム的なことって、暮らす中で何となくこう理解していく体に入ってきたといったイメージなのですかね。

※注釈：「アニミズム」とは生物・無機物を問わないすべての自然物に魂や靈が宿っていると考える思想・信仰のこと。

我々の小さいときは、「山にハブがいるから、行くななら1人で行くな」とかそういったハブが守り神みたいな感じで。だから、勝手には行きませんでしたね。豊年相撲も昔は田んぼも作っていましたから、政（まつりごと）といいますか、五穀豊穣の祭りで、神社に御神酒をあげて安全祈願をして帰ってきて、相撲をとりました。そういうものは各集落で受け継がれていて、土俵が日本一多い島です。この前ヒアリングに来た方も、土俵があるということに驚き、それが受け継がれて今も相撲をやっているということにも驚いていた。やはり、そうしたところが良さです。地元の人は当たり前と思ってやっているものだから、良いとか価値があるとか、自然保全に繋がっているとか、そうしたことがあまり感じられていないわけです。

お客様にそうした話をするとき、「なるほど」と共感・感動していただける。八月踊りにしてもそうですね。夜に連れて行ったのですが、やはり参加型じゃないですか。（踊りによる）男性・女性のかけ合いといいますか、やはりそうしたものは、とてもコミュニケーションが取れるわけです。そのため、ストーリーブックもコミュニケーションツールの1つに使いたいわけです。そうすることによって良さが伝わるのではないかと思います。



境田委員



馬場座長

私が少しだけ生活した40年前、子ども時代ですが、その頃の奄美でも若干、「行事化」していたというか、「学校がやるから」とか「公民館がやるから」「おじいちゃんおばあちゃんがやるから」みたいな。そのときでさえ、若干形骸化しつつあったのではないかと思っています。境田委員のご指摘で1つ重要な点は、「当たり前にあること」の価値を伝える相手を次の時代を継承する子どもを対象にしたお話が多くた点だと思っています。もう1つの視点として、子どももそうですし、先ほど新屋委員の話に繋がると思いますが、広く地域住民の方も対象にされていたと思います。知識の媒介者といいますか「語り部」を設定されたと思うのですが、この語り部になれる人というのは、具体的な何か「こんなイメージの人が語り部になれるよ」というのはございますか。

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム

令和7年度 第3回公民連携会議 会議録

各集落、もちろん長老がいらっしゃるのですが、区長さんを経験した方が必ずいるわけです。そういった方が80代90代になっていて、もうその方々がすごく少ないので。

行事ひとつやるにしてもそうした人が受け継いでやってきているものですから、今やっておかないと。「制度」というほど堅苦しいことではなくても「区長さんをしたら、その地域の語り部になる」みたいな。

そういうふうに受け継いでいけば、「どこの集落に行ったら、あの人を訪ねればいい」みたいに伝わるし、子どもたちの授業でもその人が話をする機会を作れば伝わっていくのではないかと。



境田委員



馬場座長

地域・コミュニティのパワーを支援するような公共としての施策、こうした方向性の施策が必要じゃないか。そのようなイメージですね。なるほど。

もう一つ重要なご指摘として、すでに組織として奄美大島DMOが形成されているというところです。ここは5市町村が共同出資しているので、それぞれの市や町にむけた単体の施策が展開できないというボトルネックがあったり、あるいは予算を自由にといったところが難しく、非常に弾力的な組織であるはずなのに、硬直化していたりする状態だというご指摘があったかと思います。

やはり奄美大島DMOという機能があるのであれば、このDMOの機能をより豊かに発揮すべきじゃないかということだと思います。もし奄美市がプラットフォームを形成し何か事業を展開したとして、DMOと連携して事業自体を推進していく。そうした既存のリソース（資源）や組織をリストアップして、どのようにつながっていくのか、そこも重要なご指摘だったんじゃないかなと思います。

奄美大島DMO自体は今、どの程度動けているのですかね。どのような感じですかね。

※注釈：「ボトルネック」とは業務の中で生産性を低下させる人や工程、箇所のこと。

地元の観光担当の課長・担当が参加してマーケティング委員会を作っていますので、その中でいろいろな情報はすぐ得られると思います。そのため、こうした人材を入れば、いい意味で市民参加型のプラットフォームとしての動きが可能になるのではないかと思います。



境田委員

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム

令和7年度 第3回公民連携会議 会議録

越間委員

たまたま今日、私の会社に小学校4年生が泥染の体験に来まして、本当に楽しそうに泥に入っていて、「やっぱりいいな、これも教育の1つだな」と思いました。

1週間ぐらい前には「ハンカチほどの大きさの布を染めたい」と高校の子どもたちが来て「何にするのかなあ」と思いながら体験を受け入れた。先日のイベントのときにその子たちがブースを出していく、たまたまうちの娘がそこに行ったら、その染めた布が、折り畳み方を教えてもらって、目玉だけを付けてクロウサギの形になって帰ってきたのですよ。すごいなあと思って、(泥染した布の) 里帰りじゃないですかともそういう取り組みって素晴らしいなと思いました。

この間も会議のときに、他の委員と話をしていて、「いろいろな取り組みやアイデアはあるが、どこに話を持っていったらいいのか分からぬ」とか「どうのつながったらしいのか分からぬ」ということで、やはりプラットフォームが必要なんじゃないかという話になったと思います。

それに対して今いろいろな方々の貴重なご意見を聞きながら、先ほどもありましたが、アーカイブを取っておいて保存して、いつでも見られるようにしておくこと。少し前に奄美大島のアメリカ統治下時代に撮っていた大島紬の工程・風景の貴重な映像が上映され、いろいろな方が見ていた。島の昔の人たちが若かったときに紬の仕事に携わっていたアーカイブを見ながら、すごくいいなあと思って、そういうものをずっと蓄積して貯めておくのが、やはりあったほうがいいのかなと思っております。

また1回目か2回目の会議のときに出てきた図鑑や百科事典を作ること。先ほども「生物多様性」という話がありましたが、修学旅行生とかがいらっしゃったときに、私はいつも「『生物多様性』って難しいですよね」と言う。「簡単に言うと、生き物がいっぱいいて、生き物・植物、あと昆虫まで含めると4万近くの生き物が島にはいて、それは日本全体の1割。奄美は日本の国土面積のわずか0.3%しかないのに、1割以上の生物が住んでいます。それが生き物の楽園です。」という伝え方をします。

そうしたいろいろな生き物とか、植物、昆虫の成り立ちや特色とかを図鑑にして、もしくは先ほどおっしゃったような漫画にして学校の図書館に寄贈するとか、そうした取り組みをする。

今、子どもたちは「図書館に行って何冊の本を読んだ」という取り組みもしていますし、最初に出てきたのが子どもたちへの教育という話だったと思いますが、それをうまく提示できるのがそうした取り組みかと思っています。

それを作っていくような、つながりを作っていくような組織・プラットフォームを作って、そこからまた派生させていけばいいのかなということが、いろいろな委員の方々の話を聞いて思った意見です。



越間委員

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム

令和7年度 第3回公民連携会議 会議録



馬場座長

ありがとうございます。やはり、いろいろなアイデア、やりたいことを持つて行く先がなかなか見つからない。そこが受け皿としてあったほうがいいなというところと、知識をどのように保全し、どのような形で伝える媒体にすべきなのかというところだったかと思います。

その資料として、子どもたちも楽しめる漫画や図鑑。お話を聞いていると、親子でも楽しめるのかなというふうに思いました。そうすると、いわゆる関心度が低い、あるいは自分のことで精一杯だという層にも届くのかなと思いました。（泥染後の布が）アマミノクロウサギの顔で帰ってくるのはちょっと面白いなと思いました。

ちょっと個人的なのですが、アメリカの占領統治下の資料があるのですか。もしかすると、価値のある資料というのが点在している可能性もあるということですかね。今、アーカイブ事業をしようとしているところで、参考になりました。ありがとうございます。

崎田委員

世界遺産の保全と活用ということのプラットフォームということで、それにふさわしい人たちが参加して、いろいろと貴重な意見を聞かせていただいております。

私の方は奄美市議会議員ということで、個人の立場ではなく奄美市議会議員 22 名の代表としてどういう発言をしていいのかという思いもあるのですが、奄美市議会は政策立案委員会というものを立ち上げています。コロナ前から立ち上げていて、空き家問題や保育の問題をテーマに取り上げています。世界自然遺産登録になったということで去年は観光をテーマにいろいろ関係団体の方とのヒアリングも行って、市に議会としての提案を行うということをやっています。

今年のテーマは防災関係です。私もその一員で、今日は別のところでヒアリングがあるので、こちらの方に参加させていただいている。観光も防災も自然と密接な関係があるのでよね。そうした点ではいろいろな方のご意見を聞く機会があって、よかったです。

私は 22 名の議員の代表みたいな形で参加するわけですけれども、私の立場、個人の立場でもやはり発言をさせていただければ、奄美の軍事の問題ですね。軍事の問題についていろいろなところで話題にならないのですよ。先日の奄美市長選挙は無投票でしたが、抑止力とか軍事関係の言葉が公約に一つも出てこないのですよ。これは平常時であれば全く問題ないのですが、今の状況ではそれでいいのかなという思いがあります。

というのは、先ほどから出ている暮らし・環境・文化ですね。それと島の将来をどうするのかと言ったときに、私の思いでは、それは切っても切れないものだと思うのです。今、民間空港でもタッチアンドゴー（自衛隊による飛行訓練）をやっているし、先日、西之表市の議員さんたちが馬毛島の関係で、奄美の議員との意見交換をしたいということで来られている。私もそのとき発言したのは、今の状況が固定されるのではなく、ど

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム

令和7年度 第3回公民連携会議 会議録

どんどん発展していくというか、日米共同訓練にしても、駐屯地ができて半年以内で行われ、それが今は県内の各離島でも行われようとしているわけです。そのときに、今の社会環境、政治環境、国際環境のもとで、もし偶発的であっても軍事行動が行われると、自然なんて！発でつぶされ、文化そのものもなくなっちゃうわけです。そうしたことに対するどこまでの線引きがあるのか。

この前、他県の某自治体で首長選挙があったときに、「軍事の方は認めるけれども、これ以上の負担は大変だ」という方が当選したわけです。しかし奄美ではそういう議論もされていない。これから「自然をどこまで守るのか」「今の世界情勢の中では、ここはもう自然がつぶされても仕方ない」といった議論がこの状況でもまだされていないというところに、ちょっと違和感がある。

駐屯地の司令官等も他県で実地訓練をした際に奄美で自然災害があるとすぐに帰つて来られないから島に訓練地が必要だと言っている。それはその人個人の考えで、具体的に話が進んでいる状況ではないが「今の国際情勢のもとではそういうことが必要。」という島の世論になるかも分からぬ。そのときはどこか自然を壊さないと訓練地は作れないわけですが、こうした議論が全くなされないままになっている。「抑止力」といっては大半が軍事抑止力を指す状況ですが、平和外交が戦争の抑止力になる。

こうした状況の中でどこまで議論を深めて、どこで線引きをして、こういう状況では仕方ないなとかね、そういう意見が進める側の方からも出てこないということについては、ちょっとどうなのかなという思いがします。

22名の市議会議員の代表だけど、私は一応、党の議員としても参加しているので、いい悪いじゃなくてね、これから島の発展のために仕方がないのか。それともやはりある程度、線引きが必要なのか。

自衛隊のみなさん方といろいろな形で民間との協働もやっていますよね。だからそれはそれで歓迎なのですが、自然災害があったときに、自衛隊の力を借りなければ絶対復興できないですから、こうした議論がもっと深まってもいいのかなという思いをしながら、みんなの意見を聞かせていただいている。



崎田委員

馬場座長

ありがとうございます。ご指摘の内容が今回の会議テーマよりも非常に高度なご指摘だったかなと思います。世界自然遺産の暮らし・環境文化と平和という概念は非常に親和性が高いというふうに今お話を聞いていて思いました。ただ、今まで世界自然遺産との暮らし・営みが平和という概念になかなか結びづらかったなと思ったのですが、平和とのつながりがあるという前提でお話されているイメージでよろしいですかね。

やはり世界自然遺産で暮らすということが平和や安全という概念とうまく結びつくような子どもたちへの教育や私たちの理解が必要だという受けとめ方をしたのですが、いかがですかね。受けとめ方的にはそんな感じですかね。

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム

令和7年度 第3回公民連携会議 会議録

世界自然遺産と平和というのは非常に親和性があることも改めて考えさせていただきました。ありがとうございます。

まだ少しお時間がございますので、前半でご発言されたみなさまから、あらためて何かあればよろしくお願ひします。



馬場座長

濱田委員

今回このプラットフォームから提言書をまとめるうえで、できるだけ簡潔に提案したいということが冒頭で座長からあったと思うのですが、このプラットフォームの名前が「奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム」。保全と活用を提案するという命題があるので、そこはぶれないように提案したいなと思います。

境田委員が、非常にたくさん提案してくれたので、こちらもまとめることに一生懸命頭をまわしていたのですが、その中で境田委員がおっしゃった語り部の話はやはり郷土史や集落史をつくるうえでいろいろなシーンで出てくる。

それとリンクして、岩浅委員からありました昭和10年前後。その付近がどうやら、昔のことをしっかり実感したものとして語れるところの（生まれ年の）ボーダーになってきているようですという話があったのですが、そう考えると、非常に急いで情報収集ややらなければならない課題もあるなというところです。

語り部に関してすごく引っかかったのが、現場で聞いていると、端的に言えば語りたくないようです。もっと言うと、「囲まれて語る」というシーンになった瞬間に語らなくなる。人に囲まれるとしゃべらなくなり、人に囲まれていないとバーッとしゃべる。そう考えると、語り部を手助けするガイドも必要かな。集落の青年団や「サポートするから、一緒にやらない？」と言ってくれる人も必要だなと。

何度もそういうシーンを見ていて、例えばこういう会議が終わった後、ご自宅にお邪魔して4～5人になったときに語るため「それさっき言ってくれたらよかったのに」と言うと「いや、あの場ではちょっと…」と言う方がよくいる。

「語り部」というのに奉られた瞬間に語らなくなるというところも押さえないと、提案するプラットフォームの中にしっかりそれを踏まえたうえで環境を整える。「それいいね。ちょっと語り部やってくれない？区長さん語って」といって、それがトントントンといかないのがまさに暗黙知にも通じるところじゃないかなと思います。

あと、境田委員や越間委員からもあったのですが、次世代につなぐアイデアというものは結構いっぱい出るのですよね。なぜかというと、自分は郷土史とかそういうのを排除されていた時代に、あまりこう「島唄すてきですよね」みたいな、そういうのをわざわざ教えてくれない時代に生まれ育ってきたものですから、今の小中高生のほうがよく知っている。だから島唄の唄者（うたしや）も20～30代くらい、40代前半くらいまでの

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム

令和7年度 第3回公民連携会議 会議録

ほうが「島唄いいよね」という感じで出てきている。そこから上がぱっかりあいていて、実は島唄にほとんど触れないで育った世代もあるので、大人でも島の文化に対する意識の低い人々は多い。

自分も含めて、「今更だけど、奄美、無茶苦茶いいね」と思っている40~50代も多いので、そこへの窓口というかアプローチもしっかり提案ができたらしいなと思います。

「環境文化」と一言で言いますけど、環境省さんは環境って言ったら自然環境のことをおっしゃっていると思う。環境と言ったらいろいろな環境になっちゃうため、環境文化型国立公園でいうところの環境といったら自然環境のことだと踏まえて言うと、その環境と文化をつなぐチーム。もちろん行政も一緒にやらないと無理ですけど、環境と集落文化と言ったらしいのか、単純にもう文化でいいと思うのですが、「環境と文化をつなぐチームを作りましょう」という、そういうところに落ち着いてくるのかなという気はしますね。

前回の会議でも、小学生の総合的な学習の時間の中で学習をしたいが、どこに相談したらよいのか分からず、一方で環境省としても小学生に体験して欲しいことがあってもどこに相談したらいいのかと。奄美市だったら世界自然遺産課なのか、お互いにどこに相談していいか分からない状況でもったいない。

そのときに僕の班から挙げた「旧暦を大事にし、旧暦の行事は総合的な学習の時間としてとらえて、学校を休みにして旧暦の行事にみんなで参加する」という意見。そうしたことでも、奄美市教育委員会が「OKです。総合的な学習の時間はそれで頑張ってください」と校長先生の背中を押せるぐらいのチームがあったら、もっともっと大人も子どもも触れる場が増える提案ができるチームがつくれるのではないかという気はします。

濱田委員



馬場座長

ありがとうございます。濱田委員のご指摘の中で、1つ重要なところは関心度と人口統計的変数が非常にシンクロしていて、50代以上のいわゆる氷河期世代というのが、奄美のいいところ、あるいは自然環境文化への関心度が低いという点です。

その人たちにアプローチする方法があまり出てこなくて、例えば子どもや30~40代だと親と子セットで教育というところが機能するでしょうし、それ以上の年代だとある程度理解もしていらっしゃるというところで、このポップとあいたそのスポットにいる方たちへのアプローチで、こういう方法があるといったイメージはありますか。

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム

令和7年度 第3回公民連携会議 会議録

それを試験的にやっていただいているのが、これは地元ではなくて、やはり県本土の大学等がいろいろな企画を立ち上げたり持ってきてくださっていたりする。

そこで勉強というか学びの講座みたいなことをすると、そこにどの世代が来るかと言ったら、子育てが少し落ち着いた、知識力・学習意欲のある50~60代の世代。

「奄美がなんか盛り上がっている。私はよく分からぬけど、興味あるな」といって歩踏み込んでいいたら「うわあ、すごいなうちの島」ということに気づいて、そこからようやく諸鈍シバヤ（加計呂麻島の民俗芸能）を見に行ったとか、徳之島に渡ってみようとなっている世代がいる。その辺もやはりすごく大事な世代かなと。

ちなみに50~60代は六調が下手くそな人が多いですよ。意外に踊れない人が多いですよ。



濱田委員



馬場座長

みなさん六調は余裕だと思っていたのですが、やはり教育、生涯学習が非常に重要ということなのですね。なるほど。ありがとうございます。

本土に住んでいる同級生といった存在、そのつながりや同窓会等はどのような感じですかね。

そこは前回の話でも出ていて、先ほど上堀内さんも市街地で生まれ育ったと言っていましたが、市街地で生まれ育ったコミュニティに関しても、本土に行ったら「奄美群島」です。共有する気持ちがあるから、やはりそこは不思議なもので、何か一緒にありますね。

（補足：上堀内氏の発言にもあったように「奄美大島」といっても各地域にそれぞれの特色があるが、本土に行くと「奄美群島」というより大きな括りでコミュニティが形成される）



濱田委員

そういうことも含めて、最初にたたき台として自分の方で提案させてもらった地域おこし協力隊のUターン枠を「Uターンの人もいいですよ」ではなく、「Uターンの人を優先募集」というくらいの勢いでやっていいのではないかと。Iターンをシャットアウトするのではなく、Uターンの人で情熱があって「ぜひやらせてください」という方がいたら、そこを優先でやる。

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム

令和7年度 第3回公民連携会議 会議録



馬場座長

某自治体のとある小さな町の政策に少し関わるときにも、私も全く同じことを提案しました。年に1人か2人、絶対にIターンしてもらう。そうすれば人口安定していくという僕の推計結果なのですが、ことごとくみんなに「は？」という顔をされてしまう。

でもやはりそれは地元で同世代の濱田委員がおっしゃるからすごく説得力が高いし、ぜひそういうお声を届けたい。



濱田委員

住用の総合戦略会議という会議にも呼ばれているが、話を聞いていたら、やはり退職した後でも「住用に帰ってきたい」という人がいて、そういう方々は熱意を持っている。地元にずっといるからこそ、しがらみの中でがんじがらめになっていたときに、そうした人が帰ってくると風が通って動き出す。しかも地元の思いも理解されている方だからみんなが動きやすくなる。



馬場座長

やはり幸福度調査の結果でも、地域に何かしたい方、特に地域おこし協力隊のような属性の方たちって、いわゆる「供給過多」状態です。つまり地域からのサポートが実はなくて、地域からの愛情を受けているという認識がない。だからちょっと供給过多で疲れてしまっているので、幸福度が若干低くなってしまったのです。

実際に量的調査でもそうした結果が出ているので、みなさんのお話のなかでも「協力してくれる人をサポートするような公共としての仕組みが必要」ということが出てきたのではないかと思ったところです。ありがとうございます。



上堀内氏

私も90歳になる昭和10年生まれの母がいて、戦前戦後の面白い話をいっぱいするのですが、その母が語り部になるかと想像したら絶対ならない。語り部と簡単に言っても、面白い話を持っている人が必ずなれるのか、ということを思いました。例えば話しやすい人が1人来て、それを録音しておくとか、そのような感じでもう早く（記録を）したらいいのかもしれない。アンケートは封を開けないと思う。

あとIターンでなくとも、「都会に出ていった出身者の声を聞く」そういうプラットフォームであって欲しい。私も子どもがいて、帰ってきてみたいような、帰ってきたくないような…みたいなことを言っているので、勝手な意見が出てくるかもしれないけどそういう意見を、聞く環境があったらいいなと思いました。

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム

令和7年度 第3回公民連携会議 会議録

お二人のご意見を伺って関連して思うのは、やはり郷土史は文字にするので、それなりに時間がかかります。既存の郷土史ももちろん活用できると思うのですが、やはり音声や動画でしっかり押さえておく。それが難しければ、その場で紙に起こしていく形でもいいのでしょうか、やはり議論になっているように、話しやすい雰囲気の中で話しやすい人に、話をしてもらう。

もう大分前に亡くなりましたけど、私の祖母が1929年、昭和4年生まれで、こういう分野に私も関心を持っていたので祖母に聞き書きしたことがあります。もっといろいろと聞いておけばよかったなど後悔しているのですが、やはりどのような暮らしがあったのか詳しいのですよね。そのため、「孫が聞き書きする」ということも世代間のつながりですごくいいことだと思うし、いろいろな工夫ができるかなと思います。今お話を伺っていて、あんまり形式張った「聞き書きチーム」とかは作らないほうがいいのかなとも思いました。

あとはUターン・Iターンですね。これは各地の現場を見ていますと「誰でもいいから来てください」というのではなくて、例えば「うちの集落にパン屋がない。パン屋ぜひ募集」みたいに限定してやっているケースは結構成功している。やはり「それであれば、ぜひ」と役立ちたいという気持ちとマッチングするのだと思うのですが、「足りない、来て欲しい」という分野をこちらから想像度高く発信していくアプローチは非常に大事かなと思う。



岩浅委員



馬場座長

ありがとうございます。やはり私も調査する人間なので「調査は暴力だ」ということをいつも念頭に置いて調査するのですが、やはりその場（雰囲気）のせいで本当に話して欲しいことを話せないということは多々ありますので、アーカイブについての意見は非常に勉強になりました。

私が聞きそびれているだけかもしれないのですが、このプラットフォームのゴールセッティング、期間的なものについて事務局のお考えを伺いたいなと思います。やはり来年の7月で早くも遺産登録5周年という非常に大事な節目の年になりますので、この節目の機会はやはり有效地に活用できたらいいなと思います。10周年となると、2031年になると思いますが、これもちょうどSDGsの目標年が2030年で、おそらくその次の目標がもう議論され始めているかもしれません。新しい目標があると思いますので、振り返りと次の後継の世界目標も踏まえて、ここも有效地に活用していくということは考えられる。奄美ならではの節目というのも当然あると思いますから、少しその時間軸をうまく整理されつつ、戦略的にこのプラットフォームをどう継続していくのか、そのあたりも事務局にお願いできたらなと思います。



岩浅委員

奄美市世界自然遺産保全・活用プラットフォーム

令和7年度 第3回公民連携会議 会議録



事務局職員

第2回からも少しお話があって今日もお話をいただきましたが、行政側・事務局側が出すテーマではなくて、みなさんが持ち寄った課題をどのように解決していくかというプラットフォームのご提案をいただいていると認識しています。

その中でこのプラットフォームがだんだん形を変えていくのがいいのか、あるいはまた新たなプラットフォームがいいのかというところをみなさんのお話し合いの中から、私たちも答えを探していくべきだと思っています。ちょっと答えになるか分らないのですが、今そういうことを考えていました。



馬場座長

ありがとうございました。ちょうどお時間になりました。

ここまで話を受けまして1月20日、第4回会議で提言書の提出というふうになると思います。

私のまわし方があまりうまくないのでみなさまのお話をちゃんと最後まで聞けたかなというところは気がかりですが、もし何か話足りないところや他にもこういった意見をというのがあれば、事務局の方にご連絡いただければお受けすると思いますので、ぜひよろしくお願ひいたします。

それでは議事は以上のため、私の進行はここまでとさせていただきます。どうもありがとうございました。

4. 閉会

事務局より今後についての説明

- 本日の検討内容を踏まえて事務局にて提言書のたたき台を作成し、後日メールにて共有する。
- そちらに対して次回会議までにコアメンバーから意見をいただき、それを反映させたものを第4回会議で最終確認を行う。
- 第4回会議の後半（15時頃の見込み）に市長へ提言書として提出する。

次回の会議（令和7年度最後の会議）は
令和8年1月20日（火）開催予定です。

以上